



学園花の村機関紙第79号

2014年6月3日(火)

編集兼発行人 松井道夫

掛川市掛川1065

TEL (0537) 24-0101

Fax 24-0242

Y-#

mm317@tokai.or.jp

尊徳に学ぶ生産の弁証法

— 蓄財から推譲への道 —

津野 幸人

以前、私が勤めていた農学部には獣医学科があった。この入試はかなりの難関で、女子学生が多かった。とある日、学部長室を訪れたのは、獣医学科から他学科へ志望を変更したいという女子学生であった。その理由は、「二年間飼った犬を解剖実験のために自分で殺さなければならぬ。これはどうしてもできない。だから、ほかの学科に移りたい」という。

早速に獣医学科に事情を質してみると、「飼いがどれほどの愛情を愛犬に抱いているか、その死がどれほど辛いのか。これを実感させるために、野犬をとらえてペットとして一年間育てさせて、それを殺すという行為を教育的見地から課しているのだ。」と、いうことで例外は認められなかった。

学科の教育方針という名分に抗すべき術はなかったのだが、いまだに割り切れない気持ち

抱いている。わが子への愛とそれを死に追いやる行為との葛藤は歌舞伎の題材にもあるが、その悲しみは情緒にとどまり倫理への道筋が見えない。人間のすべての行為は、まず善悪の鏡に照らさなくてはならない。殺すという行為は悪には違いない。が、食用用家畜の屠殺は必須の行為だ。「殺生」という「悪」から、人間を養う「善」が生じるのである。

我が国においては、古くから儒者によつて人倫、道徳が説かれてきた。しかし、その内容である仁や義はあまりにも抽象的でありすぎる。また仏教者は解脱を説き、十善戒を示すが、それは出家にしかできない戒を含む。これらに較べて二宮尊徳の定義は、以下の通りすこぶる明快だ。

「それ人は米食い虫なり。この米食い虫の仲間にて立てたる道は、衣食住になるべき物を増殖するを善となし、この三つの物を損害するを悪と定む。(夜話)。この立場からすれば、「腹くちく食うて搦きひく女子らは仏にまさる悟りなりけり」であつて、食事を済ませると、すぐに明日の食べ物をこしらえる。このさとりこそ人

道の悟りだ。と、彼はいう。生産を行わぬ僧侶へは、古歌を引いて、「世の人に欲を捨てよと勧めつつ跡より拾う寺の住職」(夜話)。と批判している。

尊徳は、貧困から脱出する方法をまず生産に励むことに求めた。生産こそ生存のための至上善である。そして、無駄を省いて蓄財を勧めるのであるが、ここまでならば単なる利殖家の域を一步も出ない。尊徳の偉大さは、蓄財を遂げたのちには、大樹の枝を切り払うように、余分の財を社会に推譲せよと喝破する。その目的とするところは、家系の永続的繁栄にある。単なる財の量的増大は子孫の墮落を招く。価値観をして量から永続性という質への転換をはかるのである。私は、これを尊徳思想における弁証法的発展と受け止める。

現代農業で量を求めれば必ず化学肥料と農薬が必要となる。有機農業では収量を「腹八分目」に抑制すれば、病害からは無縁となる。殺虫剤を散布しないで、害虫を手で捕殺すれば、彼らも生存したがっていることが分かる。やがて虫を殺す気にはならなくなる。自粛自戒の農耕が自ずと「万物共生の原理」を悟らせてくれる。これこそ自然の慈悲であろう。私はこの点において、有機農業に宗教的意義を認めるのである。